Osaka University Knowledge Archive

Title	新生児に見る子ども観 : アリエスの論を基点として
Author(s)	津田, 悦子
Citation	大阪大学教育学年報. 2000, 5, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9460
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学教育学年報 第5号（2000年）
Annals of Educational Studies Vol .5

新生児に見る子ども観

～アリエスの論を基点として～

津 田 悦 子

【要約】
西洋の近代的子ども観の基本枠組みを明るみに出したアリエス著『〈子供〉の誕生』の「子ども」はいかなる年齢集団を対象としているのか。これについてのこれまでの見解は一致せず矛盾の様相さえ見せている。「子ども」年齢の追究は、発達段階理論の発展に伴って未成年者全体と単純に想定するだけでは不都合な場合もあり、今後その必要性は増していくように思われる。そこで、アリエス論における「子ども」年齢を探る手段として、「新生児期」という最初で最短の時期を取り上げ、「新生児」への言及を拾い出し、考察を加えながらその位置づけを模索する。その一連の作業から見出されたのは、「子ども期」の歴史が「新生児」に関わる事象とそうでない事象に二分されていることであった。つまり、近代以前の「子ども」が軽率に扱われた証拠となる事象は「新生児期」と関わりを持ち、反対に、近代以降の「子ども」の記述内容においてはなぜか人生初期の「子ども」への焦点がぼやけるのである。一括りにして述べられる「子ども観」の中で、最も「大人」にとって異質な「子ども」である「新生児」は、過去の親子関係の劣悪さを強調する役割を担わされたのだろうか。これから必要とされる「子ども観」にとって、重要な基礎となる歴史把握に疑問を提起する。

問題の所在と考察方法

近年増加する一方の、いじめ・不登校・学級崩壊等、子どもを主体とする問題に向き合う際、大人が子どもをどう理解するか、子どもの存在をどう捉えるか、つまり子どもに対する基本的な考えや姿勢という「子ども観」の問題が重要になってくる。

その「子ども」とは、親にとっていつまでも続く「子ども」ではなく、「おとな」に対峙する相対的な概念を指す。この相対性ゆえに、「子ども」が指し示す範囲は不確定となるのだが、こうした不明瞭な「子ども」概念が充満する今日の状況は、近年における「子ども」の発達段階が細分化傾向を示しているのとは逆の方向に指しているかのようである。少年法の刑法適用年齢に関しても、「子ども」をあやふやなままにしてはおけないという現実問題もある。

「子ども」の年齢に関するこうした疑問は、人生のある一部が「子ども」として妥当かどうかを問うことによってさらに強くなる。そこで、本稿では、近代的「子ども観」の基本的枠組みを明らかにしたとされるアリエスの著作に、人生最初期の「新生児期」を見据えることを通して、その問いを投げかける。すなわち、アリエスによる「子ども」年齢の把握を分析し、「子ども期」と「新生児期」の関係を考察することによって、「子ども」の年齢的差異の存在を示しつつ「子ども観」の歴史把握を再考する。

その際、半ば定説化した西洋近代の「子ども観」を示すアリエス論をめぐって「子ども」年齢が不確定であるという現状を見るのであるが、その「子ども観」の史的変遷の中に、なぜか偏って「新生児期」固有の性質が強くすくい取られているように思われる点を指摘する。

本稿において「子ども」年齢を重視したのは、「子ども」と一括りして問題のない場合はともかくも、時としてその内部の段階的差異が、例えば、性的成熟に達しているか否か、言葉による意志疎通ができるか否かが、大人からの扱いやまなざしに少なからぬ差を生じさせるという事実を強調したかったからである。その点、「新生児」はモチーフとして際だった存在となる。というのは、眠ってばかりで喃語さえ発しないこの特殊期の人間にいたっては、他の「子ども期」の人間に比べて、大人からの対応に明らかな差異が生じても何ら不思議ではないからである。

最終的に本稿は、「子ども」年齢に関する見解不一致が十分押さえられぬまま、次から次へと「子ども論」が打ち出されている現状、－これが今後の「子ども観」においていかなる問題に発展するかについてはさらなる熟考を要するのであるが －その先走りに一旦「待った」をかけて、現在混乱している子ども—大人関係を把握するための、何らかの示唆を得ることを目的とする。

1.「新生児」という「子ども」

具体的な考察に入る前に、まず「子ども」と「新生児」が異なる領域に帰属するという点を押さえておく必要があるだろう。すなわち、「新生児」が医学的・生物学的概念であるのに対して、「子ども期」は歴史社会的概念だと捉えられているということである。帰属領域の異なる両概念を同一線上で論ずるために、生物学的にも社会的にも共通する基準となる「年齢」に目を向けることによって、すなわち、「新生児期」を「子ども期における最初の数週間」と理解することによって、考察は可能になると考えたい。まずは「新生児」がいかに新しいタームであるか、そしてそれがいかなる年齢にあたるのかを明らかにしよう。

現在の「子ども」が17世紀末葉に歴史社会的に「誕生」したと見なされている一方、「新生児」の認識はそれよりもかなり時を遅くして医学分野において「誕生」する。「新生児」の原語の内で、より専門的な〈neonate〉が公的文書において初めて使用されたのは1932年で[1]、用語としての「新生児」が日本で産声をあげたのは、その初期の訳語である「初生児」「新産児」が登場した後の、今世紀後半以降となる。

その定義を総括すると、「新生児期」は生後1～6週間である。しかし、例えば、日本小児科学会新生児委員会の定義では、「妊娠・分娩の影響が消失し、子宮内寄生生活から子宮外独立生活への生理的適応過程がほぼ完了するまでの生後1～2週間」とされる一方、WHOや統計分野では生後4週間とされている。また、臍帯が脱落するまで、新生児黄疸が消失するまで、生理的体重減少が回復するまでという、個人差のある生理現象で規定する定義も見られる。6週間という最長期間はそうした点から導き出されたものと思われる。

ところで、こうした時期の子が「新生児」として類別されずにいた頃は、日本では「嬰児」

「赤子」「緑子」等、より広義の意味を持つ言葉が使われており、西洋でもその点は同様であったと思われる。英語の〈baby〉は18世紀頃まで〈child〉と同義で使われていたとされている。すなわち、思春期の区別もなかった頃は人生の初期段階も大ざっぱであり、なかでも、「新生児期」に当たる時期の人間に対する注目度の低さは、推し量るに難くないだろう。

そうした時代に比べれば、今日の「新生児」へのまなざしはかなりの変化を受けたことになる。特に医療分野では、産科と小児科を一貫して母子を看る周産期医療が発展し、新生児医学も出現した。『新生児学入門』(1988)の著者である仁志田によると、70年代にこの分野の勉強を始めるにあたっての教科書は一冊しかなかった（仁志田 ix頁）ことからも、その進歩の急速さが窺えよう。しかし、現在の進展が見られるまでは、「新生児」への医療は実際に長い間医学的に無視されていた。そうした状況に対して、ハーバード大のクレメント・スミス教授は、新生児に対する医療が産科と小児科の狭間に位置するまさしく「闇の谷」[2)]だと警告し、関係者の関心を向けさせたのが1930年頃で（中平8-9頁）、周産期学が本格的に一つの学問分野としてドイツで確立されたのが70年代後半だとされている（Lenzen 33-63)。

「新生児期」の重要性は、生理学的に行われる二つの転換に見出される。すなわち、母体内の寄生生活から外界で独立して生命を維持するために、胎盤呼吸は肺呼吸へと変わり、胎児血液循環は新生児循環へと切り替わる。これらの重大な、呼吸と血液循環における転換がスムーズに行われなければ何らかの適応不全問題が生じることは確実だと見なされる。つまり、「身体障害のほとんどすべてが胎内と出産時の前後、いわゆる周産期で決定される」（中平, 8頁）のである。

他方、心理学や精神医学領域で「新生児期」が取り上げられるようになったのもここ数十年のことと新しい。この傾向の背景には、精神分析学で人生最初期それ自体と、そこでの母子関係の重視への動きがあったことや、動物実験や文化人類学での母子研究、そして、心理学領域での知覚等に関する「新生児」研究やローレンツやポルトマンらのエソロジーの思想等、実に多様な方面からの影響が認められている。さらには、70年代以降のアメリカ医療界で行われた、母子早期接触が子への愛着にいかに作用するかを見ようとした実験研究も重要である。ここからの、出産直後の母子早期接触や母乳哺育が母子のきずなを形成するという説が日本にも波及した。当時日本の産院には新生児室という、戦後GHQの勧告を受けて作られたシステムが普及していたが、母子がそのシステムにより産後引き離される事態が生じていたために、アメリカからの母子のきずな説の影響もあり、以前採られていた母子同室制へと切り替える現象が起こってきている。

以上から、新生児期は、近代以降「誕生」した現在の「子ども期」にもまして新しい人生の一時期であることが確認される。よって、「新生児」というキーワードで検索できる資料は限られてくるわけで、その場合は、出産直後から生後数週間の人間という条件で「新生児期」を探索せざるを得なくなるケースがあることを、あらかじめ想定しておかねばならない。

2．アリエスの「子ども」

中世期には固有性を持つ「子ども期」は存在せず、現在の「子ども」は近代以降に誕生したとする、その新たな発想で幅広い分野に大きなインパクトを与えてきたアリエス(1914 - 1984)の研究は、「子ども観」論議で今もなお多く引用され、その頻度は「ほとんど聖書のように」と形容される程である。以下、その主著『〈子供〉の誕生』(訳書1980)が「子ども」[3)]を語る際の基本的枠組みを提供してきたという事実に基づき、その著書における「子ども」の年齢について目を向けることにする。「新生児」にまつわる人生最初期の記述は、本書に一度目を通せば、少なからず存在することに気付くだろうが、詳しくそれを見る前に、まずはアリエスが捉えた「子ども」の特徴を見ることとしよう。アリエスの「子ども観」とはどういうものなのか。そして、そこでの「子ども」はどういう年齢集団に属するのだろうか。

1)「小さな大人」とは

さて、アリエス論の抜粋として語られることの中に「小さな大人」がある。アリエスは、中世期の絵画を中心とする図像を解読し、当時の子どもは近代以降の「子ども」ではなくて「小さな大人」だと見なす。「子供は認められていず、子供を描くことが試みられたこともなかった」(訳書35頁、以下同様) 中世芸術の中での、わずかに副次的人物としてのみ描かれた子どもは、子ども期固有の特徴を持たない、単に大人より背丈が小さいだけの「小さな大人」であったという。

この「小さな大人」のいる社会では、仕事、散歩、遊びなどあらゆる集まりで大人と子どもが合流し、そうした「大人の当然な仲間たるものにならねばならなかった」子ども状況を作り上げていたのは、具体的には「徒弟修業」および「見習い修業」であることが判る。

従って、「徒弟修業」を前提条件とする「小さな大人」には、本稿の「新生児」は該当しないことになる。「新生児」はいかなる時代においても「徒弟修業」をしない。実際に、この「徒弟修業」に入る年齢を、アリエスは「結論」の冒頭で明示している。「……子供たちは、……七歳位になるとすぐ大人たちと一緒にされていた。この時から、子供たちは一挙に成人の大共同体の中に入り、老若の友人たちと共に、日々の仕事や遊戯を共有していた」(384頁、傍点筆者)、と。

2) ふたつのアプローチ

「新生児期」は「子ども」の一時期であっても、アリエスがかつての「子ども」の特徴として表現した「小さな大人」ではなかった。そこで、一旦「新生児」は脇に置くことにしよう。この「小さな大人」とアリエスのいう「子ども」がいかに関係するのかを見ていくことにする。

本書の「序文」には論が導かれるためのアプローチが記されている。一つは、「教育の手段として、学校が徒弟修業にとって代わった」変化を追うものと、もう一つは「家族内での意識の変化」を追うものである。すなわち、アリエスは、学校の変化と、家族の変化を追うことによって、近代に入ってからの「子ども」の「誕生」を裏付けようとした。

論文の構成を見てみると、「序文」に続く第一部「子供期へのまなざし」では、子ども期がその固有な性格のもとに人生の他の諸時期と区別されていく叙述に始まり、絵画を中心とする図像、服装、遊び、道徳意識などの習俗的側面から子どもの取り扱われ方に現れる変化の分析がそれに続いて行われる。第二部の「学校での生活」では学校制度の発展が主に論じられ、そして第三部の「家族」では、絵画等の描写を通して見た家族の変化が分析される。

従って、上記の二つのアプローチはそれぞれ第二部と第三部のテーマと重なっている。第一のアプローチおよび第二部のテーマである「学校化」に関する内容は、「大人たちのなかにまざり、大人と接触するうちで直接に人生について学ぶことをやめ」た「小さな大人」たちが、近代の学校に「隔離」されることによって、大人と対置する「子ども」となったことが述べられる。つまり、ここでの「子ども」とは学齢期に相当する年齢集団だということになる。

次に、第二のアプローチおよび第三部の家族の意識の変化においてはどうだろうか。内容を追っていくと、中世には種々雑多な人々で構成されていた特殊な家庭外環境で濃厚な感情交流が行われていたため、家庭内では特にそれが必要とはされていなかった状況が説明される。そして、そこから徐々に子どもを中心として感情の渦巻く近代家族が出現していくという変化が導かれる。アリエスは、こうした変化後の「家族としての意識と青年たちの強度の学校化とは同一の現象の二つの側面」(4頁) だと見る。つまり、家庭内で「子ども」に対する新しい「教育的配慮」という意識が生まれたからこそ「子ども」は学校に行くことになったことが理解されるのであるが、そうするとここでも学齢期の「子ども」が主役となる。

しかし、以上のことから、アリエスの「子ども」はほぼ7歳以上の学齢期を指すと、単純に結論づけてはならない。なぜならば、アリエスの「子ども」に関する研究の中には、学齢期以前の「幼児期」を強調するものも見られるからである。次には、その研究を紹介することによってアリエスの「子ども」年齢理解における矛盾の一端を示し、よりアリエスの真意に近づくことを目指すことにする。

3) 家族と幼児期の発見

さて、近藤 (1990) は宮澤説(1988)にならって、『〈子供〉の誕生』の主題を「子ども」ではなく「家族」に設定する。そして、近代家族から生まれ出る「第一のサンチマン」(感性を伴った、ものの見方) である「可愛がり」や「甘やかし」が「幼児期」と深く結びつくとし、第一部第二章「子供期の発見」での「子供期」は、「正確には〈幼児期〉を指す」(52頁) と述べる。その証拠として、「その身体、その習性、その舌のまわらぬ喋り方を含めて、幼児期が発見された」(50頁　傍点筆者) という当章を締め括るアリエスによる文が挙げられている。

確かにアリエスの「幼児期」に関する言及は数多い。幼児の身体や習性をかわいいと思う気持ちが表現に値するようになったこと、特に幼児の「片言」への関心が現れ始めた現象には少なからぬ紙面が費やされている。その通り、間違いなく、近代に入って「幼児期」は発見された。

しかし、この「幼児期」の「発見」は、「子ども期」としてよりもむしろ正確には文字通

り、「幼児期」として発見されたように思われる。というのは、かつて、7歳になるまでの時期は「幼児期」ではない、一応の「子供期」であったからである。

アリエスは、中世での「子供期に相当する期間は、〈小さな大人〉がひとりで自分の用を足すにはいたらない期間、最もか弱い状態で過す期間」(1頁)と見ていた。従って、中世には「子ども期」が無かったとアリエス論が理解される場合、それは、この時期が「あまりにも短く、あまりにも取るに足らぬ」(2頁)時期であったという理由からである。換言するならば、中世において存在した「子ども期」=「幼児期」は、近代以降新たに可愛がられる存在の「幼児期」として「発見」されたのである。

さて、この「幼児期」は明らかに家庭内で「発見」された。近藤が「幼児期の発見」を強調したのは、アリエス書の主題を「家族」と見たからであって、そこには何ら矛盾はない。問題は、「幼児期が発見された」とする文のみを根拠に、「幼児」に限った点である。なぜならば、アリエスが打ち出す第一のアプローチはまぎれもなく「学校化」なのであるから。

4) 児童期が指すもの

さて、子ども史関連諸研究の動向を鳥光は1981年の論文で考察しているが、特にそこでアリエスの「子ども」を特徴付けている様子が窺える。つまり、ほんのわずかの例外を除き、アリエス論が考察される箇所では、「子ども」というタームの代わりに、「児童」が専ら使用されているのである。具体的には、「児童期の起源」「児童期の意識」「児童期の概念」等である。もちろん、一般に「児童」は、「子ども」と同義で使われることがある。それは、「児童」の「児」の旧字「兒」は頭蓋骨が固まっていない者を指し、「童」は奴隷やしもべを指すことからも明らかであろう。「児童憲章」や「児童権利宣言」などがそれに当たる。しかし、鳥光がここで使用している「児童」はそうではなく、むしろ「学童期」の印象を受ける。なぜならば、鳥光が同論文内で言及する、アリエス以外の子ども史諸研究者に関しては例外なく「子ども」が使われており、しかもそこでは、「児童」は使われておらず、逆に、アリエスに関する記述中には、アリエスからの邦訳表現として一般的な「子供期」は一切見られず、「児童期」がそれに置き換わっているからである。そこに何らかの意図があるからこそ「児童期」が使われていると受けとれるのである。

また、アリエス論を受けてポストマン(1982)は、16世紀の印刷機発明が識字能力の有無を根拠とした子ども－大人関係を創り出したという前提のもとに、現代社会は映像メディアの登場により「子ども」を「大人」から区別する根拠が再び消失しつつあるという「子ども期の消滅」を述べるが、その「子ども」は「七歳から十七歳ぐらい」(5頁)だとしている。よって、ポストマンの論は一貫して「小さな大人」に相当する「学齢期」ということになる。

宮澤(1988)は、「幼児期」を強調した近藤が「家族」を主題にしたとするなかですでに言及したが、アリエスの主題を家族におく説を彼よりも先に論じていた。しかし、「子ども期」に関する見解は近藤とは異なりを見せる。つまり、彼は「子ども期」を、鳥光およびポストマンと同様に、狭義という条件付きではあるが、「学童期」と見なしたのである。広義の「子ども期」は「大人に対して未成年者全体を漠然と指すが、狭義では、青年期とも幼児期とも区別される少年期」だとした上で、この「少年期は、今日では学齢期と言いかえられる

こともある」(21頁）と述べている。さらに、森田(1986）もアリエスの「子ども期」について考察を行っているが「六、七歳以前」と「六、七歳以降」という「二つのレベル」に分ける必要性があるとし、森田は後者の「学童期」を中心に論じている。

以上を総括すると、アリエスが「発見」した「子ども期」は、家族を主眼におくと「幼児期」が強調されるが、そうでなければ「学齢期」と捉えられる傾向にあることが判明する。つまり、近藤を除けば、一般に多くの研究者は、アリエスが近代以降に「発見」した「子ども」、もしくは、それに基づいて現在も語られている「子ども」を、「小さな大人」に相当する「学齢期」であると見なしていることがわかる。この点を押さえて、次に、アリエスがいかに「学齢期」以前の幼少期、もしくは「新生児期」を捉えていたかに注目する。

3. アリエスの「新生児期」

1）その拾い出し

訳書において、「新生児」のタームは一カ所のみ、それも本文中ではなく初版出版年から13年後に執筆された「序文」に見出される。そこでの文脈は、11～12世紀頃まで年に2回の集団的洗礼が主に「幼児」を対象としていた状況から次第に「新生児に洗礼を行わせることになった」(10頁　傍点筆者）とするものである。この時期すでに「新生児」への意識変化が芽生えたことと同様、「新生児」の概念があったことも意外に思われるが、その語を原書に探すと、「tout petit enfant（非常に小さな子供)」を、訳者が「新生児」と置き換えていることが判明するのである。

ところで、上記が唯一の「新生児」という語の見られる箇所であるため、これ以降は単語による検索ではなく、言語表現から「新生児」と推測される箇所を探すことにしよう。そこで、これに該当するものとして、「生後三日」および「生れたばかりの子供」という表現をまず取り上げる。

前者は、17世紀の墓碑に施された彫像に関する記述(43頁）にある。ジェームズ一世の娘は「生後三日」で亡くなったが、揺籃に入った姿でしっかりと描写されていたという。このことは、中世の絵画には見られなかった「子供」と対峙する。

次に、後者の「生まれたばかりの子供」という表現は数カ所に認められる。まず、17世紀中頃に「裸の姿の、生れたばかりの子」が肖像画に登場したというくだりにおいてであり、もう一つは、17世紀以降新しい傾向としての「幼な児イエス」への信仰が生まれたとする箇所である。そこでの、「生れたばかりの子供のようになさしめ給え」という祈祷の言葉には、「子ども」の純真さと無垢性への崇敬の念が込められているが、この維持すべき「子ども」の特性が、同時に理性で克服すべき「無知と弱さ」を併せ持ち、現在の教育学における両義性として未だに引きずられていることは看過し得ない点であろう。

さらに一カ所、「生まれたばかり」の表現が上記の例とは異なって、近代以前の「子ども観」を表現する箇所に見られる。12世紀頃の「ルイ聖王詩篇集には、生まれたばかりのイスマエルが、成人の男性の腹筋と胸筋をそなえた姿で描かれている」(35頁）が、これは「現

実と対応するものでもなかった」(36頁)「子ども」、つまり「小さな大人」との類似として紹介されている。

以上、一見して「新生児期」と察せられる例は確かに複数認められる。しかし、そうした例がアリエスによって挙げられている事実にのみに基づいて、アリエスの「子ども期」に「新生児期」が含まれていたとここで即断するのは、当時の一般的社会心性をそれらの例がどの程度まで表わしているかが明確にされない限り、危険だと思われる。実際、例えばポロクは、より幅広く、アリエスが語る「絵画が現実をどの程度まで描写しているか」(ポロク訳書59頁)と、問うているのである。

さらに、作業を続けて、次は内容から検討し、「新生児期」への言及を拾い出すことにする。そこでは、「子どもの死」および「嬰児殺し」という事象が挙げられるだろう。「子どもの死」は、かつては多く生まれた「子ども」が多く死んだという文脈の中での「死」で、別の子で代替可能な「死」を指す。年齢層は、匿名状態の時期、もしくは、「死亡率の高い」、「生存の可能性が不確実」(123頁)な時期だと表現されているが、もちろんそれは「新生児期」に限定されないし、限定することは正しくない。そこで、その「死」の時期と「新生児期」の完全な一致を追求するのではなく、両者がいかに関わっているかを重視していくこととしたい。その点を、次のアリエスが引用する二例から探っていく。

一つはモンテーニュの時代、子が多く死に、そのために親の無関心が生じた過程が示される例である。つまり、モンテーニュは自身の子が3人死んだにもかかわらず、「痛恨の思いがなかったわけではないが、不満は感じなかった」(40頁)と述べたというが、彼の子が全て「乳呑み児」(40頁)であったことがその根底にある。モンテーニュの引用は別の箇所にも現れる。「愛らしく見えはするものの、魂の動きもなく、人間らしい身体の線も持っていない、まだほんの生れたばかりの子どもを抱きしめるがごとき熱情を、受け入れる事は出来ない……」(125頁、傍点筆者)から窺えるのは、明らかにモンテーニュの「新生児観」である。ならば、その「新生児観」と彼自身の「乳呑み児」の死を結びつければ、モンテーニュの「乳呑み児」は「新生児期」か、それにかなり近い時期だと捉えられるのが自然であるのかもしれない。もう一例、モリエールに関しても、「私の子供たちは、みな乳児期に死んだ」(40頁)との言葉がアリエスによって引用されている。

従って、アリエスがこの両者の言を中心に論じる「子供の死」は、「乳児期」における「死」に焦点を絞っているようにも思われる。むろん、日本での「七つ前は神のうち」という言葉にも見られるように、子どもの死は決して「乳児期」に限定されるものではなく、七歳ごろまで頻繁に見られる事柄である。しかし、ここで見過ごしてはならないことは、生後一年以内を指す「乳児期」の、さらにその12分割の初めの一部分(=4週間)に当たる、統計上の新生児死亡数は事実極めて高いことである。近年のデーターにおいても、「新生児期」は、時期的には「乳児期」の12分の1に過ぎないのに、死亡数は乳児死亡総数の実に半数以上を占めている[4]。「乳児死亡の八,九割が新生児の出産のとき」(中平1986, 8頁)と明示する文献もある。「新生児期」は、胎内環境から胎外環境へ適応するための重要な生理学的大転換期であること、さらに、生命力の弱い未熟児も「新生児」の数に入れられていることを顧慮すれば、新生児治療が施されるまでの長い間、いかにその時期の子が多く死なざるを得

なかったかが無理なく察せられるのではないだろうか。

さて、次に取り上げる「嬰児殺し」の事象は、ローマのコンスタンティヌス帝によって犯罪と見なされた時期があるにしても、「十七世紀末葉にいたるまで大目に見られていた」(8頁）ものであったとされる。タームとしての「嬰児」は「新生児期」を含み、およそ3歳までを指すこともある。よって、「嬰児殺し」を「新生児殺し」と移し替えできないのは当然であるが、ここにおいても、いかに「嬰児殺し」が「新生児」を抜きにしては語れぬ事象であるかを見ることにする。そうした両者の密接な繋がりは、古くはスパルタでの習慣から理解することもできる。そのスパルタの習慣で使われていた、弱い子と強い子の選別をするための道具、すなわち弱い子を殺すための道具は、酒の入った「産湯」であったと言う。つまり、そこで「殺された」のは「新生児」であったことになる。また、より普遍的には、親が初めから育てる意志を持たぬ場合は、早期であるほど効率的かつ合理的に処置され得るのである。母体面では、それが確実な堕胎が可能でない時代であればなおさらのこと、出産直後に処理するのが最も安全だと見なされる。この点は日本での「間引き」研究からも窺うことができるだろう[5)]。

「新生児期」に「嬰児殺し」が多く行われたと推測できる理由として、看過し得ないことがもう一つある。それは、人間の感情面、すなわち「情」の問題である。例えば、親子が共に過ごす時間が長くなるにつれて、「情」は移り、深まる。これは愛情のみならず責任や利害であるかもしれないが、いずれにせよ何らかの根源的な肯定的感情の存在は重要であろう。

「嬰児殺し」に一つ付け加えれば、「新生児」のタームでも見られたごとく、その記述は1973年に執筆された「序文」にのみ言及されている。「もし私が今日この本を書かねばならないとしたら」、「関心を向けていたであろう」(8頁）事象として触れられているのである。16頁にわたるこの「序文」には、本論に比べて人生最初期への言及が多いように思われるのであるが、これは察するに、初版の1960年から「序文」執筆の1973年にかけては「新生児」研究が顕著に増えてきた時期であったこととも少なからず関係しているのかもしれない。

2)「新生児」に対する意識変化

近代以前の「子供」がいかに無視され、悪くすれば、残酷に扱われてきたかを示す事象として、上記の「子供の死」や「嬰児殺し」が挙げられているが、これらは近代以降どうなっていくのだろうか。近代以降、顕著な減少が見られたのだろうか。このことを次に考えていきたい。

まず、「子供の死」に関するアリエス論が混乱していることに触れる必要があるだろう。つまり、かつての多産多死の「避け難い帰結」として、子に無頓着になったとした後で、アリエスは「人口学的な条件が依然としてそれほど有利ではない状況にとどまっているのにたいして（子の死亡率が高い事)、子供期の意識が早い時期から出現することに驚かざるを得ない」(40-41頁　括弧内筆者）と言い、あたかも自説を否定するかのような印象を与えるのである。その点をポロクは、「もし幼児がよく死ぬから親が無関心だとするなら、どうして幼児の死亡率の高い間ずっと親の無関心の状態がつづかなかったのだろうか」(33頁）と問うのである。

さらに、アリエスは、「子供を死ぬにまかせない」という親の意識の誕生が子の死亡率を低下させたのであって、医学・衛生学的理由にはよらないとするが、その説明は見あたらない。本田(1999)の見解はこれと食い違う。「かつて、多産多死で徴付けられていた子どもという存在が、多く生まれても多く生き残り得る存在へと変化したのは、彼らが、医学・薬学分野における研究成果を直接的に享受し得たことによっている」(本田47-48頁）との記述からは、アリエスが述べるような、近代意識が死亡率に与えた影響は全く感じられない。

「嬰児殺し」に関しても、それがいかに近代意識の影響を受けて好転したかについては不明確である。例えば、ペスタロッチが「立法と嬰児殺し」(1780)を著したという事実からは、「嬰児殺し」が社会問題化したことは納得されようが、「嬰児殺し」自体は18世紀後半になっても存続していたことが判る。福本(1984)は、フランスにおける「捨子」と「嬰児殺し」を、ペスタロッチ以降の19世紀に限って論じているが、そこから窺えるのは、匿名で放棄したい子を無条件で受け取る公的施設が1860年まで存続し、その廃止後は「嬰児殺し」や「堕胎」が急増したこと、そして19世紀の間に「出産千に対する死産数」が1.5倍以上増加するが、その数字にはかなりの「偽装された嬰児殺し」が含まれていたと推測されることなのである[6]。

つまり、「新生児」にからむこれらの現象は、近代意識出現前の「子ども観」を代表するものとして引き合いに出されてはいても、それが近代以降いかに変転したかは明確ではない。よって、乳幼児への言及をアリエスがしていることだけに依拠して、「新生児」への意識変化もあったと結論付けるのはあまりにも短絡的だと言わざるを得ないのである。

ここで視点を変えて、ハント(1970)によるアリエスの「子供」年齢についての考察を見てみる。ハントは、かつての「小さな大人」に満たない、七歳ごろまでの「子ども期」は大人の関心を引かなかったとしたことを、アリエスの誤認だと見る。アリエスとエリクソン両氏に師事したハントは、エリクソンが幼児期の発達を細かく3段階に分けた上で親による世話や関わりの普遍的重要性を説くのに比して、アリエスが同時期の子を軽視しすぎていたことを指摘する。そして、その態度を原始社会の育児を偏って観察した初期の文化人類学者に喩え、「たぶん、アリエスは中世の子に対する“無関心さ”の水面下にあったものを探しきれなかったのだ」(p.47)と述べる一方、アリエスは自説の弱点に気づいていたとして、7歳頃に設定していた近代以前の「子供」終了年齢を意図的に何度も下げたとする。7歳とすべきところをある箇所では5、6歳にしたり、遊びの章ではそれが3、4歳になっていたりする。アリエスはこうすることによって、近代以前における「子ども期」の軽視という事態を過度に誇張してしまった自説の誤りを訂正できると思ったのだろうかと問われている。その誇張が甚だしい例としてハントが引用したのは、「子供たちは、母親ないしは乳母の介助が要らないと見なされるとただちに、すなわち遅い離乳の後何年もしないうちに、七歳位になるとすぐ大人たちと一緒にされていた」(Hunt　p.48：アリエス384頁、傍点筆者）という箇所である。「七歳」と「離乳」を結びつけるのには、確かに無理がある。

つまり、ハント説から窺えるのは、アリエスが近代以前における「小さな大人」として扱われるまでの、7歳に満たぬ「子ども期」に対して大人は無関心であったとしつつも、人生における「幼児期」の重要性を認める用意がアリエスにはあったように思われること、しかしながら、それはあくまでも「幼児期」であって、「新生児」は含まれていないことである。

その後者に関しては、ハントが、「新生児(newborn infant)」の無力ゆえの依存（helpless dependance）という性質が仮に7歳まで続くのならば、年齢に関するアリエスの混乱は解消されるだろうにと述べられていることからも明らかになる。さらに、もう一つ、ハントによる「幼い子供」の特徴を見ると、「大人とコミュニケーションが取れる」、「大人と複雑な関係を維持できる」、「欲求を表現できる」等という、とても「新生児」には当てはまらないものが挙げられていることにもよる[7]。すなわち、「新生児」は「幼い子供」と同等には見なされていない。これに関連して思い起こされるのは、アリエスが「幼い子供」の特質のなかで近代以降愛されるようになった「片言」を述べる箇所である。つまり、その「片言」とは「大人」にある程度意味が通じる言葉として表現されていた。

以上、ハントからは「幼い子供」に属さぬ「新生児」の独自の姿が見られたが、次に、近代の教育思想家であり「子どもを発見した」とされるルソーが「新生児」をどう見ていたかに注目したい。

ルソーは、その著書『エミール』に興味深い記述を行っている。「わたしたちは学ぶ能力がある者として生まれる。しかし、生まれたばかりの時は、なにひとつ知らない。なにひとつ認識しない」(訳書69頁)。ルソーは続ける。「生まれたばかりの子どもの運動や叫び声は純粋に機械的なもので、認識と意志を欠いている」。さらに次のパラグラフでの、誕生時に「子どもが一人まえの人間の身長と体力をもっていたと仮定」し、それを「完全に無能な人間であるにちがいない」とするくだりでは、ルソーによる広義の「教育」がいかに人間が発達するために重要であるかが明確にされているのではあるが、他面、ここにははっきりとルソーの「新生児観」なるものが垣間見えるように思われる。というのは、現在でこそ新生児研究の成果により、誕生直後でも優れた知覚能力等が認められてきているが、そうした知見がなかった時代の「新生児観」は、ここでのルソーによる記述と一致するからである。「かれにはなにも見えず、なにも聞こえず、人を認めることもできず、見る必要のあるもののほうへ目をむけることもできないだろう。自分の外にある対象をなにひとつ知覚することができないばかりでなく、それをかれに知覚させる感覚器官になにひとつ伝えることもできないだろう」（69頁）という表現は、「単なる肉塊にも等しいもの」と日本で長らく民衆の間で考えられていた「新生児観」とも重なりを見せるのである。

しかし、ルソーという人物は、人間を、「生きはじめると同時に学びはじめる」（32頁）存在と捉え、誕生と共に教育が始まることを打ち出したことでも知られている。そのルソーが、「新生児期」の子を、「子ども」からも「幼い子供」からも排除したのだろうか。『エミール』を読み進むと、ルソーが「人生の最初の時期」を定義する箇所に行き着く。「子どもは話すこと、食べること、歩くことを、ほとんど同じ時期に学ぶ。これが正確にいって人生の最初の時期だ」（96頁）とする。この記述を近年の通例から具体的に考えれば、話すことは早くて生後1年半頃、離乳を約半年、歩行開始を約1年ぐらいとなろうか。時代を遡れば、その時期は遅くなることはあっても早まることはない。ならば、ルソーはそれまでの、「新生児期」を含む時期を何だと見たのだろうか。この問いにルソーは答えてくれる。「それまではかれは母親の胎内にあったとき以上のなにものでもない」（同上）。「新生児」は胎児と同等だと、見なされていたのである。つまり、「新生児」はルソーの「発見」した「子ども」に属して

はいなかったことになる。

さて、これまでの考察を振り返れば、「新生児」が「幼い子供」とは本質的に異なる存在だととされていることが、アリエスが引用するモンテーニュ、ハント、そしてルソーの思想から明らかになる。特にルソーは、「新生児期」を「人生の最初の時期」にも入れていない。こうした扱いの中で、「新生児」は、近代以前の「子ども観」を代表する「子供の死」や「嬰児殺し」においてその当事者として位置しているのだが、近代以降の「子ども像」からとたんにその存在はうすれていくのである。近代以降、アリエスの「子ども」に基づいて現在まで語られてきた「子ども」は、主題を「子ども」におく限り、「学齢期」が中心になっていたことはすでに述べた通りである。さて、この矛盾は何を意味するのだろうか。

4.「新生児期」の役割

ところで、精神分析学の心理機制概念を用いて[8]、親子関係の進化を段階付けたドゥモースの理論は、その極端な現状肯定のために批判を受けやすいのではあるが、そこには以上見てきた「新生児観」に関する、ある重要な構造が現われているように思われる。

その進化段階を概観すると、第一段階は、古代～4世紀の「子殺し的様態」で、親は子育ての不安を解消するために子を殺した時期。第二段階は13世紀までの「子捨て的様態」で、子殺しが重罪とされたことから子捨てが増えた時代だとし、第三段階の「対立感情共存的様態」は17世紀まで続き、そこでは子どもは作り替えられるものと見なされる同時に、優しい母のイメージの定着を見る時期。第四段階は18世紀頃までの「侵入的様態」という、親が子どもの内面に入り込みコントロールしようとする時期で、続く19,20世紀の「社会化的様態」は、子どもの社会化を重視する時期。そして、最終段階は20世紀半ば以降の「助力的様態」で、子自身が各発達段階での欲求を理解できる、これまでの親子関係の進化の中で最高レベルだとされる。

この理論が展開されたのは『親子関係の進化』(1982)[9]においてであるが、そこでは「子殺し」と「子捨て、乳母預け、スウォドリング」に、一章づつ当てられている。つまり、これらの概念は、ドゥモースの進化段階においてその初期段階を構成する大変重要な要素と見なされているのである。これらの事象が、このドゥモースの論においても、「新生児」を当事者として描かれているのだろうか。

「日本語版への序」においては、日本での「子殺し」が産声をあげる直前に行われたこと、すなわち「新生児期」に行われたことが記されている。本論でも、育てるに値する新生児の識別方法や、生後直後に性別が判った時点で女児が間引かれた事例等、明らかに「新生児期」だと見て取れる記述が実に多い。ただし、「子捨て」は、人身売買やいけにえというケースにおいては必ずしも人生最初期に限られないのが、「乳母預け」「スウォドリング」は、逆に「新生児期」を除いては語れない事象であることが判る。「乳母預け」が行われる年齢に関しては個人差が大きいだろうが、アリエスの訳者でもある杉山(1991)が挙げる慣行例は、「生れて二日を経たくらい」(341頁）から約2年間行われるというものである。さらに、「スウォ

ドリング」は、親の仕事が妨げられないように子を身動きできなくするための、もしくは、身体の矯正を目的とし、身体を細長い布でぐるぐる巻く「産着」だったと説明されている。

上記の事象は、他の多くの研究者が、かつての親がわが子に対し、良くて無関心、ひどい場合は残酷であったことを証明するために挙げてきたものと完全に一致する。「多数の学者は、幼児殺し、捨て子、巻き布の産着、乳母による養育などの慣習を過去における幼児無視と見なすばかりか、子どもに対する一般の無関心の証拠として」（ポロク63頁）挙げてきた。そして、これら全てが「新生児期」に十分な関わりを持っていたと見なされることはすでに考察した通りである。

そこで、再度ドゥモースの段階を眺めると、ここにもやはりある切れ目が見えてくる。つまり、第三段階を境に、「新生児」が絡む以前の「ぞっとするような」過去の歴史と、「新生児」との関わりが見えない近代以降の段階とが、それによって二分される構造が現れてくる。ドゥモースを含め、アリエス以来、「子ども」は未成年者全体だと容易に受け取られがちであるが、「子ども」年齢を重視すれば、その歴史の筋書きに沿った年齢の偏りが浮き出てくるのである。

20世紀後半以降、新生児研究が極めて急速に「新生児」の有能さを明らかにしてきたが、その存在への意識は近代以前以降を問わず一貫して低かったことを念頭におくと、「新生児」に絡む事象は、「子ども」が近代に「発見」されたとする論を支えるため、もしくは、その論旨を明快に印象付けるための道具として、偏って誇張されてきたように思われるのである[10]。

以上の考察から、史的子ども観における「子ども」の年齢的差異がこれまで見すごされてきたことを認識するとともに、それが「子ども観」における捉えがたい諸問題の一因となっていると疑ってみることも必要ではないだろうか。

5. おわりに ～「新生児」と同一視されるものによせて～

さて、「大人」に対峙する「子ども」を想定した場合、「新生児期」の子は「子ども」に含まれて当然だと考えられる。にもかかわらず、その時期の人間が「幼い子供」にも入れられない事態を招いたのは、「大人」から見て「新生児」があまりにも異質の存在であったからにちがいない。言葉が通じない（ように見える）からであり、認識能力がない（ように見える）からだと思われる。自分とは異質のものを認めようとしない傾向を、われわれは確かに持っている。

本稿においてそうした異質の「新生児」を取り上げた理由は、「子ども観」における疑問を提示するための手段であったことはもちろんであるが、もう一つ、「新生児」と同一の性質を持つものへ注意を向けたかったためでもある。すなわち、それは具体的に言うと、言葉による意志疎通が困難な知的障害者であり、痴呆性老人であり、その他様々な植物人間をも含む重度の患者であり、人間とは種の異なる動物たちであり、ひいては生命を持つ生き物全てである。

近代に入って「しだいにやかましく子供の生命を尊重することへの移行がなされた」(ア

リエス9頁）なかで、未熟児をも含む「新生児」にも、とにかく生かす努力が医療的になされてきた。現在の「新生児」へのまなざしは、ゆえに、昔とはちがっているのだが、それは日本と西洋とにおいても同一ではない。西洋の背景にはキリストの教えが息づいていた。そこには、神から授かった生命に対する畏敬があり、その生命を精一杯生きなければならないという信念があった。

その「生命への畏敬」は勿論自分自身に対するのと同じように他のものに対してもあるはずだが、その点においてもやはり、異質のものを認めようとしない傾向がわれわれにはある。「堕胎」がそのよい例であろう。大戦後も、堕胎可能な妊娠期間は抑えられてきてはいるが、優性保護法の一部改訂のもとに経済的理由による適用が認められ、「堕胎」しやすい状況が生み出されている。つまり胎児は人間の始まりであるにもかかわらず、われわれ現代人にとってもいまだに異質の存在なのである。

最後に、本稿の根底で密かに脈打っていたテーマは「自分とは異質なものへのまなざし」であったのだと、今となって気づかされる。ここで今一度、「子ども」へ話を戻せば、近代以降、大人から異質の存在とされた「子ども」は、それによって固有性が認められ、独自の配慮をもって育まれる機会を得たのではあるが、他面、ある時期から「子ども」は異質と見なされたがゆえに、大人はもはや「子ども」と同じ目線に立って何も見ることができなくなってしまったのではないのか、とも思えてくる。今後の研究はこの点に立脚して進めていきたいと考えている。

＜注＞

1）1989年版『The Oxford English Dictionary』(pp.320)

2）聖書詩篇23篇にあるダビデ歌「たといわたしは死の陰の谷(the valley of shadow on death)を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」から取ったという。

3）アリエスの邦訳書に見られるのは「子ども」ではなく「子供」であるが、本稿では、引用部以外では、現在の「子ども論」でほぼ統一されているがごとく、「子ども」と表記している。

4）丸山博氏が提唱した、乳児死亡率を新生児死亡率で割って得られる指標としての「αインデックス」の表に基づいて算出した。(藤岡光夫「統計的乳児死亡研究におけるαインデックスの利用」『旭川大学紀要』25, 1987.11, 199-250)

5）桜井由幾 1993「間引きと堕胎」『第15巻　女性の近世』中央公論社 97-128頁

6）両者の研究では、未婚の母の問題が当時多かったことを考慮する必要があるだろう。

7）「新生児期」にも言葉によらぬ母子相互作用（ｴﾝﾄﾚｲﾝﾒﾝﾄ）のあることが最近注目されている。

8）それらは、投影反応、反転反応、共感反応であるが、本論の主旨と、それらの各進化段階への関わりは重要性を持たないとし、本論においてはこれについての言及は省いている。

9）これは、ドゥモース編著 The History of childhood (1976)から6年後に出された FOUNDATION OF PSYCHOHISTORY(1982)の中の一論文 "The Evolution of Childhood" の翻訳である。

10）むろん、こうした実態と意識とのずれは、興味深いことに、ドゥモース理論においてある程度まで説明されうるのではあるが。というのは、彼の6つの進化段階は順に入れ替わるというのではなく、各段階が重層的に積み重なっていく、すなわち、低次元の段階も存続する構造になっているからである。

＜参考・引用文献＞

Ariés, P:1960 L´ENFANT ET LA VIE FAMILIALE SOUS L´ANCIENRÉGIME Éditions du Seuil 杉山光信・杉山恵美子（訳）1980『〈子供〉の誕生』みすず書房

本田和子 1999『変貌する子ども世界』中公新書 中央公論新社

福本逸美 1984「捨子・「嬰児殺し」とその背景」『Etudes francaies』20, 大阪外大仏研究1-31

林 浩康 1997「子ども観の歴史的変遷」『北星論集（社）』第34号 55-71頁

Hunt, D 1970 PARENTS AND CHILDREN IN HISTORY Basic Books, Inc.

近藤 弘 1990「「近代家族」と子ども」『立教大学教育科研究年報』34, 49-60頁

Lenzen,D 1991 Krankheit als Erfindung Sozialwissenshaft Fischer

中平邦彦 1986『パルモア病院日記』新潮社

仁志田博司 1994『新生児学入門』医学書院

deMause L. 1982 " The Evolution of Childhood" from FOUNDATION OF PSYCHOHISTORY Creative Roots Inc. 宮澤康人（訳）1990『親子関係の進化』海鳴社

宮澤康人 1988「アリエスの近代と子ども・家族・学校」『社会史のなかの子ども』新曜社

森田伸子 1986「アリエス『〈子ども〉の誕生』を読む」『子どもの時代』新曜299-327頁

Pollock,L.A. 1983 FORGOTTEN CHILDREN Cambridge Univ.Press 中地克子（訳）1988『忘れられた子どもたち』勁草書房

Postman,N 1982 THE DISAPPEARANCE OF CHILDHOOD Dell Publlishing Co.,Inc. 小柴一（訳）1985『子どもはもういない』新樹社

Rousseau,J.J.: ÉMILE, ou DE L´ÉDUCATION 今野一雄（訳）1962『エミール上』岩波書店

杉山光信 1991「「子ども」の思想史」『子ども』（現代哲学の冒険2）岩波書店317-379頁

鳥光美緒子 1981「近代社会と子ども観」『教育学研究』第48巻3号 41-50頁

Attitudes towards Neonatal period in Childhood

— based on the thoughts of Ariès —

Etsuko TSUDA

The first purpose of this paper is to look into the age-range of "children" who are described by Ariès (1960), because both the upper and the bottom limits of "childhood" are very obscure in his book and several studies on this have so far presented inconsistent points of view. The second is to get the idea of Ariès about the specific children in neonatal period who sleep two thirds of the day, cry or suck when awake and cannot make use of verbal communication. In the course of it, this paper finds that there is a discrepancy in the history of childhood with regard to the child's range of age. That is a gap between the "discovered" children's and the children's premodern phenomena seen in "indifferent" treatments like, as deMause shows, child-killing, high mortality, customs of swaddling and resorting to wet nurses, all of which are, incredibly, concerned with the neonatal period. Contrary to it, the former seems to have no relation with that very first stage of life. In short, although the various age-range of children has been mixed and told in the history of childfood, the neonatal period which is approx. till six weeks after birth, seems to have been used for accenting the negative side of the parent-child relationship. The neonate is the ultimate far end of childhood from the adult's standpoint and, therefore, is very alien to us. Studies on outlook of childhood for the future should necessarily have its history as its fundamental pool of idea, but it might now be needed to reconsider its propriety.